



連載16回

志茂田景樹の「あのころ……」

御茶の水橋口は鬼門だつた

志茂田景樹（作家・白門40年会会員）

わが母校は素敵な大学だつたなあ。何しろ授業に1回も出なくて

も追再試験を受ければ、学年の正規の試験より優しい問題で点数も

甘くしてくれて単位をくれた。そ

れでも結果的に2年留年したが、

それは落とした単位があまりにも

多く、大学側になるべく負担をか

けまいという愛校心も働いて、2

年に分けて完済、いや完璧に取得

しようと思つてのことだつた、と記憶している。

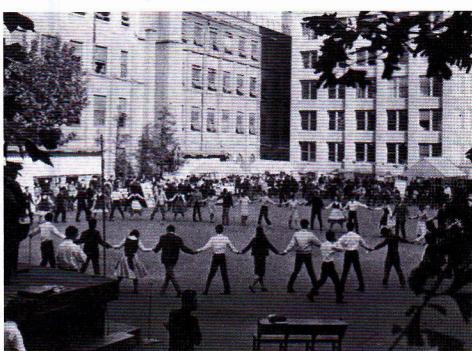
く通つた。昼食を撮影所の食堂でとつていると、石原裕次郎や、小林旭が取り巻きを連れて隣のテーブルにくることがあつた。裕次郎がテーブルに足を上げ、洋モクを吹かしたことがあつて、こいつ思ひ上がりつていると反発した覚えがある。ほんとうは羨ましかつたんだろうね、おれも早くこういう身分になりてえ、と。

そんな日の翌日は、お茶の水で下りてもお茶の水橋口の改札から駿河台に居すわつてこの大学は得をしたんじやないか。いまどきの

口を出て明大の前を通つたら、凄い校舎になつていたので驚いた。この前、久しぶりにお茶の水橋駿河台に居すわつてこの大学は得をしたんじやないか。いまどきの受験生は東京に出てきてまで草木の匂いのする大学には通いたくな

い、という意識だもの。都心にデソと構えていたほうが人気が出る。でも、今の学生はどこで憩つて

いるんだろう。学生臭もしなくなつてゐる。



駿河台校舎中庭でのフォークダンス

